

十字表象の研究

井 本 英 一

M. Eliade はその著書, *Patterns in comparative religion*, 1958¹⁾ の292ページ以下で、十字架の起源を生命の樹に求めている。同書 266-7 ページに植物崇拜の7つの型をあげ、これらに共通するものとして、樹木がたえず再生して生きる宇宙を象徴的にあらわすものであるとしている。つまり十字架も再生のシンボルである。この点は自分が以下に述べようとすることと同じ意味をもっている。キリスト教神学における贖いのシンボルその他の解釈は神学上の問題であるので次元を異にしている。

エリアードにかぎらず、欧米人の十字架の起源に関する学説は、宇宙樹、世界樹、生命樹に帰することで軌を一にしている。M. Ebert, *Reallexikon der Vorgeschichte* や J. Hastings, *Encyclopaedia of Religion and Ethic* や Pauly-Wissowa, *Pauly's Real-Encyclopädie der classischen Altertums-wissenschaft* を参照されたい。

第8回国際人類学・民族学会議における Romulus Vulcanescu (Rumania) の発表“‘La colonne du ciel’ chez les Roumains”²⁾ は参考になる。氏によると、ルーマニアには新石器時代いらい「天柱」と呼ばれるモニュメントがあるが、それは宇宙樹の神話的観念に由来するものである。宇宙樹は天を支える軸であり、その枝に、太陽、月、星などの天体が宿るとされた。しかし、ダキヤ人のこの古い表象は後代の封建時代には、人像の表現と混合するか、ないしはそれにとって代わられた。しかし、ルーマニア人の間には「天柱」の3つの型が存続している。それはY形の円柱、T形の円柱、♀形の円柱である。Y形は2つの軸が天空を支えていることを示す。T形は天秤のように均衡のとれた天空の支点をあらわす。♀形は、その円形によって原始的神話のシンボル（太陽、月、星など）をあらわす。この表象は、現代ルーマニアの画家や彫刻家の作品にも生かされている。

氏の説は興味ぶかい。そこでは天柱=宇宙樹としながら、同じルーマニア人 Eliade のように十字架と関連づけをしていない。また、氏はこれらの表象が人像にとって代わ

十字表象の研究

られたと述べている。じっさいに、意識的に人像に代えたのか、がんらいダキヤ人の間でも、天柱の変種として（後述するように、天柱がかえて人像の変種である）人像が存在していたのか、2つの可能性が考えられるが、自分は後者の蓋然性の方が高いと思う。天柱の解釈は氏じしんのものなのか、ルーマニヤ人の中のものなのかははっきりしないが、かりに後者だとすれば、それは民族の表象であってシンボリズムの本源の意味とは異なったものであると考えられる。かりに前者だとすれば、自分は別の解釈もっている。

200以上も変種のある十字架のひとつにラテン語でいう *crux ansata* がある。把手つきの十字という意味である。T形の上にたてながの環のついたものである。環の形は卵の先の尖った方が下にくるような形である。生物学で使う雌の記号と同じものもある。十字架の起源を生命樹とみる説では、T形のたて棒を茎、よこ棒を双葉、環を新芽とみる。つまり、クルックス・アンサータを生命力の象徴とみるのである。美術では、死せるオシリスに対してこの十字架が向けられ、環部から生命の水と考えられるものが死体にそそがれると、オシリスの体の各所から麦の芽が出てくる。クルックス・アンサータはまた、王の即位礼などの通過儀礼の図にもかならず出てくるものである。ある図では³⁾、T形のたて棒とよこ棒の接点から二本の腕を出してアビュードスの聖旗を支えている。これは参考になる。美術ではまた、クルックス・アンサータがナイル河に立っているで、これはがんらいナイルの水量計か、みおつくしであるとする説がある⁴⁾。この説も参考になる。大阪市章との関係はあとで論ずる。このほか、この十字はもともとサンダルの紐の形をあらわし *ankh* の音をもっていたので、生命力アンクに借音されたという説もある⁵⁾。クルックス・アンサータは極東にまで旅をしている。奈良唐招提寺金堂に安置された千手観音立像（奈良時代作）の向かって左がわの一手にエジプト美術でみるのとまったく同じものがみられる。

Crux ansata と同類の十字の変種に *double-axe* がある。クレータ王ミーノースの宮殿ラビュリントスにはおおくの双斧のしるしが刻まれていることは、クレータ文明をあつかった書物にはかならず出てくる⁶⁾。ラブリュスはカーリヤ語かリューディヤ語で双斧をあらわしたが、ギリシャ語に借用されている。ヘーロドトス 5.119 から、カーリヤのラブラ（ウ）ンダにゼウスの聖所があったことがわかる。ペルシャ戦争ころには、まったくギリシャ化した双斧の聖所があったと考えられる。

ローマでは、ダブル・アクスは *fascēs* であらわれている。*Fascēs* の形象は、双斧の柄に薪が束にしてしばりつけられたものである。これは執政官の権力の象徴で、親衛

隊のような人物が執政官のそばでこれをささげていた。周知のように、ファッション、ファッションの由来した語である。ファスカスはエトルリヤからローマにもたらされたと古代ローマの史家は伝えている⁷⁾。よこ棒が両端に向かってひろくなっているタウ十字は、クルックス・アンサータのT形にもみられる。

王権の象徴としてのダブル・クロスはヒッタイトの美術にもみられる。インド・イランの世界でインドラとミスラが手にする vajra/vazra は十字あるいはダブル・アックスのあらわれである。漢訳「金剛杵」はもとの「槌」としての意味をよく伝えている。形の上からみた術語、三叉戟がこれで、雷箭⁸⁾より古い意味をもっていたと考えられる。ヨーロッパの mace (英語) もやはり mallet と同類の語で、起源的には槌であった。漢字の「王」の初形は、説文の解説とはちがって「まさかり」であるという⁹⁾。おそらくこの解釈は妥当であろう。シンボルでもって実体をあらわしていると考えられる。極東にも斧の文化の残存はみられるのである。東南アジアのクメール族の出産の儀礼のさい、斧が用意される。産児の毛髪がきられ斧形に斧にはりつけられる¹⁰⁾。ダブル・クロスに似た形に毛がはられるのも重要である。ここでは、斧は通過儀礼のうちの出産儀礼で用いられている。いずれにしても「再生」に用いられる点では、王権のシンボルの使用と基底は同じである。王権と再生については西南アジアをやられる読者には周知のことなので述べる必要はない。斧形ではないが、日本で中古くらい正月卯の日や小正月にかざられた卯槌、卯杖もこれと同類のものである。いずれは唐土渡来のものであろうが、インドの三叉戟ないし錫杖、ギリシャのヘルメースのカードゥーケウス、ローマのネプトゥーヌスの三叉鉞、ヨーロッパのメースをならべてみると、十字形斧であったことが明らかになろう。日本の古墳期の出土品である「玉杖」は¹¹⁾、カードゥーケウスであり、「儀式の杖」と解釈されているのは妥当である。

T形シンボルは殷の甲骨文にもあらわれる。一例¹²⁾では、ある儀式を行なった肅なる人物につづいてTの記号がみられる。白川静教授はTはその儀礼を意味すると解釈しておられる。自分の考えでは、後述するが、十字シンボルのひとつであって、名前にそえられた亜字標識の変種である。「丁」は説文いらい釘のあたまの形象とされるが、シンボリズムの立場からみると疑問がある。丁は人をあらわすと考えなければ説明のつかないばあいがある。また、孔子の祭りである2月と8月の丁祭は、孔子の霊の祭であるので、丁は孔子像に関係するものであろう。後述すると思うが十干の文字はいずれも人の形態と関係があると考えられる。中国の華表や和表や桓表はT字形の標識で、前2者は墓標であることに注意されたい。

T字シンボルは十字シンボルと同じように新世界にもみられる。マヤ文明の都市コペンの遺跡の神像はT字シンボルを刻した小槌状の神器をもっている¹³⁾。別の遺跡(5～6世紀)の祭壇の前にはT字形シンボルがみられる¹⁴⁾。

いままでみてきたように、ダブル・アクス形とT字形と十字形はさい然と分けられないばあいがおおい。アルファベットのTの歴史をみると、フェニキヤ形では、Tは×または+である¹⁵⁾。ここから明らかになるのは、タウ十字とアンドルー十字(ロマノフ家の使用したもの)とギリシャ十字とは基底においては同一のものであったということである。フェニキヤ文字はシナイ文字+×をへてエジプトのクルックス・アンサータにまでさかのぼる¹⁵⁾。メーロス島とテラ島のギリシャ古体文字には、TとならんでYに近い文字もある。もっともギリシャ文字Yは別に存在するけれども¹⁶⁾。

十字架の変種に万字 swastika がある。梵語 svastika- の示すように、吉祥のしるしである。万字はオーストラリアと北アフリカを除いた世界各地にみられる。万字を⊕のシンボルと関係づけて、法輪、太陽あるいは女性をあらわしたものであるとする。それらのもつ生命力が万字の意味と考えられている。また、クレータの甕の画にも万字がみられるが、これをスワステカ最古の画とし、その発生はエジプト人が星を十字形に表現していたのを、流動する曲線を好むクレータ人が十字の末端を曲げたものと考えられている¹⁷⁾。これらの解釈はいずれも形象の表面の解釈に終わっていて普遍性をもった深部にまで達していないうらみがあると自分は思う。先史時代の北ヨーロッパやトルキスタンの土器その他にこの文様がみられるが、比較の手順をへればその意味はさらに明確になるであろう。

エジプトのカノーポはミイラの内臓をおさめた壺であるが、エトルスクのカノーポは骨壺である。前7—8世紀のものと考えられるエトルスクのカノーポは人間の頭部を蓋にしているが、万字がみられる。カノーポの前段階であるヴィラノーヴェ文明の骨壺の蓋は人面に移行する途中の様式である。この壺にも万字がみられる。シチリヤの骨壺にも鉤十字の文様のあるものがある。これはシチリヤがギリシャ本土と貿易を行っていたからだとする¹⁸⁾。エトルスクの顔面壺は興味のあるものである。のちに考察することにする。仏教の舎利壺と同じようなものがエトルスクにもみられるわけで、仏教だから万字というわけにもゆかないのである。仏頭を蓋にした舎利器がありうることも予想できる。仏教考古学では周知のことかも知れないが。

万字は死者に関するものだけでなく生誕に関するものでもある。中国雲南省のモソ族の創生神話では、大洪水ののちひと組の兄妹のみが生きのこり、人間の始祖になる。こ

の話じたいの分布はかなり広いが、そこに登場する主人公の象形文字に×や卍がついているのは注目すべきである。この2つの十字の変種がそれぞれどんな意味をもっているかは不明であるが、始祖の生産性に関係のあることは明らかである。死一生という再生のシンボルとしてそれがあらわれるのはエトルスクのカノーポを含めて同じである。クレータの甕にしてもトルキスタンの土器にしても、墓の副葬品かその他の儀礼用のものであったのかも知れない。

Y十字は、キリスト教では十字架上のキリストをあらわすとされ、祭礼においては特別のパッションをさそう。Y形をひと形とみる感覚は自分のそれとも一致する。ルーマニアでは天柱とみられていることは前述したとおりである。Y形の木は日本では古来聖なるものとしてあつかわれてきている。招魂儀礼に二股の木が用いられるからである。日本書紀履中天皇即位前紀三年に、天皇がふたまた船を市磯の池にうかべ、あそびたもうたとき11月という冬至の真冬に、御さかずきに桜の花が落ちた、とある。また、古事記では垂仁天皇は尾張の二俣すぎで二俣舟をつくり、やまとの市師池、軽池にうかべて、唾の御子と遊ばれた、しかるにこの御子は空を飛ぶくぐいのこえを聞いて、はじめて声を出された、とある¹⁹⁾。二股の舟を用いる舟遊びは、何らかの意味をもっているはずである。ことに後者の垂仁天皇の御子「ホムチワケノミコ」に関しては、これが御子の魂ふりの行事であったことがうかがえる。履中天皇のばあいも、冬至の季節（旧暦での）の天皇と皇后の魂ふりの行事であったと考えられる。天皇と皇后はそれぞれ別々に乗船されているが、ふつうの遊びではこんなことをする必要はない。

二股の木は神の依代として、股のところに供物を置いたり、幣を結えたりするが、例えば、33回忌、50回忌などの葬い上げのさいにだけY形の卒塔婆を立てる習慣は注目にあたいする。また、Y形の木の片面を削って供養の文句を書いた「犬そとば」がある。動物が死ぬと立ててやるようであるが、古くから犬そとばは子安信仰と深い関係もっていて、産における犬とY形シンボルが重なり合ってこのような名称ができたのだと考えられる。最終忌に立てるY形塔婆は巨大な葉のついた生ま木を用いるので、葉つき塔婆と呼ばれるが、イヌマキのような本格的なものを使おうとすれば、初回忌から用意しなければならない²⁰⁾。

神木としての二股木、葬い上げのY形木、犬そとばいずれにも共通していえることは、それらが招魂の儀礼に用いられることである。最終忌の塔婆にはまた、葉つき塔婆のほかに、巨大な人面を象った塔婆を立てることに注目する必要がある。

いままでみてきたように、アンドルー十字と呼ばれる×形シンボルは、十字と共にし

ばしばあらわれる。日本では、2本の青竹を交叉させて、軒につける習慣は、葬家の標識が×印であるという伝承を伝えている。また、幼児を葬ったところに割竹を曲げて十文字にさす、いわゆる「はじき竹」というものがある。これは方角によっては×となる。十字シンボルとして墓場に巨大な青竹や棒で十字を立てる風は諸処で見られるし、盆の精霊迎えに同じような十字を立てる風もある²¹⁾。コノシロはタブーにされる魚で、幼児が死ぬと鯨2尾を十文字に結んで墓に入れる風は各地から報告されている。はじき竹にしても、鯨にしても、幼児は死んでもすぐにどこかで生まれかわるとする親の気もちが、古い伝統と共にあらわれているのだと思う。盆の精霊迎えの十字架は、岩田慶治氏が報告している東南アジアのターレオに似ている²²⁾。生後1ヶ月ぐらいに氏神さまに宮参りをする。そのさい生児の額に×印をつけて行く習慣は広くゆきわたっている。いわゆるアヤッコである。京都の旧家の人は犬の字を書くが、それはそれなりに意味のあることであると考えられる。このことは別稿で論じたので触れない。より古い形式はやはり×である。これは、呪いとは別に化粧の起源だといえはその通りであろうが、通過儀礼にあらわれる十字シンボルである²³⁾。岩田氏の報告にあるクメール族の出産儀礼の×印を参照されたい。正月の宝舟に又印が書いてある。又印は古い呪符の×印の転化したものだという²⁴⁾。この感覚はよいと思う。みおつくしと関説して後述する。葬式の帰りにきよめのために鎌で十字を切るまじないをする習慣がある²⁵⁾。修験道で九字（忌みことば）を切るのはたてよこに4線5線を切るばかりでなく、単に十字を切ることもいう。中古いらい、子供の形代として側においたあまがつかは、丸い棒2本をラテン十字架ふうに結んだ素朴なものであった。十字とひと形とが合一していることに注意していただきたい。考古学的には直弧文のことが頭に浮ぶ。×印とらせんとを組み合わせであるこの文様には正鶴を射た解釈がほどこされている²⁶⁾。

新世界にも十字シンボルはふんだんにある。マヤの宇宙観では×形シンボルは太陽のしるしであると解釈されている。太陽はいったん地下に沈んでも夜明けと共に出てくるのである。古典期（9世紀以前）の彫刻には死のシンボルと対になって出てくる。これを証するように、暦日の日をあらわす絵文字には×がはいっている²⁷⁾。7世紀のマヤの聖都の神殿（複）では十字とトウモロコシと人面とが様式化されていたり、人面の上に十字が立ったりしたものがみられる。これは旧大陸の生命樹や世界樹の性格を具えたものとみられている。パレンケの神殿の石棺の蓋には十字架が刻まれてある²⁸⁾。アステカの宗教とキリスト教には多くの類似点があり、やはり十字架がシンボルに使われた²⁹⁾。インカ皇帝も十字シンボルを使っている³⁰⁾。オーストララジャにもある。中央オースト

ラリヤ人は、祭のさいに頭上に十字を立てて踊る。インドネシア、セラム島原住民の創生物語の絵には十字とそれをとりまくらせんの文様がある³¹⁾。直弧文と類似した文様である。

ダブル・クロスと呼ばれる✕ないし米シンボルがある。十字の変種と考えられるが、その意味は自分にはよく分からない。古くはシュメール語の神 dingir をあらかず決定符である。星形から天帝の意味となったと考えるのももっともであるが、比較をしてゆくと納得できないものがある。メソポタミヤのダブル・クロスは米かそれに輪のついた⊗にみられる。さらにこの下に三日月よりの☾がつくものがある。太陽と月のシンボルである、としたり、舟にのって渡る太陽神であると解釈されている³²⁾。エジプトの冥界 Dat は⊗であらわされ、星が地下界の住人であるからとされる³³⁾。☉の形は、サーサーン朝王冠宝飾の大半にみられるが³⁴⁾、これはメソポタミヤの伝統の流れである。

☾を三日月とみるのは自然で、舟とみるのも自然である。しかし、エジプトからイランにかけてみられる有翼円板像に照らしてみるとその変種のひとつであるということに気がつく³⁵⁾。イランにいたって、有翼人像になっているが、Figs. 14-18、ヒッタイトでは円板の左右に翼部がある、Figs. 12a-12m。円板は+または米のシンボルか菊花文をもっている。イランの有翼人像のように、全体からみて十字形をなすものが多い。興味のあるのは、円板をダイダイにみたと、正月の飾りとそっくりなものがみられることである、Fig. 12h。サーサーン朝コインに彫られたフラウン像 (Unvala) は、エジプトのクルックス・アンサータより人像に近く、2本足である、Fig. 26。ちなみに初期イスラム期のイランのコインには☽印が彫られていた³⁶⁾。これも人像である。コイン打造者のアルテル・エゴである (後述)。イスラム期の三日月シンボルは、有翼円板から分離して太陰暦のシンボルと合流したものではないかと自分は考えている。伊勢神宮ほんらいの象徴のご神体と考えられる黄金のみ樋代とそれをおさめるみ船代は、メソポタミヤの☉シンボルと対応するものではないかと思う。黄金のみ樋代は、エジプトのミイラを覆う黄金の ka の像や、オシーリスのミイラを覆う黄金の像と同じ機能をもったものではないかと思われる。福岡県珍敷塚古墳の壁画のいわゆる「太陽の舟」に関連づける説があるが、参考のため。み樋代に何か十字シンボルがあれば自分の説に有利となるが、知りようもない。漢字「帝」は甲骨文では𠩺である。この中に自分はダブル・クロスをみる。上のよこ棒は天上を指す指示記号と考えられる³⁷⁾。

自分はこれまで、エジプト十字から始まって、さまざまな十字表象をあげてきたが、その途中で、ときどきこれが人像と近い形象をもつことに読者の注意をうながしてきた。

イランの有翼人像は、西方の有翼円板から発展した形と考える必要はないのである。すでにエジプトにも有翼人像がみられる。ここでは十字、ダブル・クロスと人像とが平行して出てきている。さて、はじめに、ルーマニアの天柱のT形、Y形、♀形が、後期の封建時代に人像にとって代わられたという学説を提示したが、前3者のシンボルは「宇宙樹」ではなくひと形であることは理解しようと思う。♀形はエジプト十字♀の脚部の省略された形にちがいない。げんにルーマニアにはこれらのシンボルが生きているわけであるが、いっぽう人像のシンボルも伝わってきている。途中でとって代られたのではなく、おそらく平行して伝わってきたのであろう。T形やY形への抽象化がどのような理由で、どのような動機で行なわれたかは分からない。宇宙樹という解釈はヨーロッパの伝統的な解釈に従ったのだと思う。

人類は太古から、肉体は朽ちても魂は永続するという観念を持っていた。魂は目にみえないものであるが、虚像として目にうつるものと考えていたようである。古事記の天若日子の物語では³⁹⁾、天若日子のもがりのとき、死んだ天若日子と容姿がいとよく似た親友の神が訪ねてきたので、父や妻は天若日子は死んだのではない、とって手足にとりすがってなき悲しんだ。親友の神は死人に比べられて怒り、もがりの小屋を劍で切り伏せ足げにする。この物語は、もがりの終りにアルテル・エゴ alter ego が殯宮にあらわれ、殯宮をこぼち、死者の再生が完了した儀礼をあらわしているものと考えられる。親友の神は天若日子のアルテル・エゴであった。アルテル・エゴが本人の虚像でなく、親友であるばあいも世界には多くみられる。イランの世界にみられる男どうし、あるいは女どうしのきょうだいの誓いは、ある種の儀礼をともなるとりかわされる³⁹⁾。古代のミスラ信仰にもこの一面があると考えられる。日本の兄弟分にもアルテル・エゴの一面がみられる。同じ親方の子方どうしやかね親をとった者どうしが兄弟(姉妹)分の盃をかわす。喪に服するのもこれらの兄弟分である。Age-mate としての兄弟分の関係はいろいろな形態をとる可能性が考えられるが、これらはその1例である。

アルテル・エゴないしはドッペルゲンガー Doppelgänger が死者に近づいてくることは、天若日子のばあいのように魂ふりを意味し、死者が再生することになる。しかし、アルテル・エゴが人から遠ざかることは、その人の死を意味する。江戸時代の影の病、影のわずらいがこれで、病人が2つにみえたといわれる⁴⁰⁾。臨終の病人をみまもる人の目が極度に疲れているとき、病人の姿が急速に2つにわかれていくという。

アルテル・エゴは死に関するものだけではない。婚姻のひとつの形態としての掣まぎらかしでは、花掣のアルテル・エゴである親友が花掣の座につき、花掣は末座につく。

ときには花弁は別の友人連と外で遊興する。これは後期の発展した形態と考えることができよう。重大な通過の時点にアルテル・エゴがあらわれることに注目すべきである。つまり再生の儀礼にあらわれるのであって、天若日子のばあいと基底は同じである。

ドッペルゲンガーは、敵によって人為的に作られて、類感呪術の対象とされるが、ここでは関係がないので触れない。

自分の体の中に、もうひとつの小さな人間がいることがアフリカでみられる⁴¹⁾。これなどは自己とアルテル・エゴが合一している古い型であると考えられる。

アフリカのコンゴのパブウェンデ族のあいだでは、重要な人物や首長をニオムボ（ミイラ）にして葬儀にそなえる。さらに死者そっくりな巨大な人形を作り、ミイラをこの中に入れて野辺送りをして人形ともに埋葬する。死者の家は焼かれる。人形の顔は口を開いて歯をむき出しにしている⁴²⁾。これは古代エジプトのミイラとひと形棺の形式と同じものである。エジプトのミイラは3重のひと形棺におさめられた。最後の、ミイラを覆う棺は黄金製で、もっとも重要なもので ka の像と呼ばれた。ミイラは ba の像と呼ばれた⁴³⁾。マヤ文明のパレンケの遺跡の棺も3重になっているので、三戸の法は何らかの意味をもっていたにちがいない。それはさておいて、オシーリスの復活儀礼においても、オシーリスはミイラの形につくられ、金の型に入れられた。このばあい、オシーリスは砂と粘土で作られていた⁴⁴⁾。前述したように、オシーリスの儀礼には、クルックス・アンサータを死体に近づけるものもあった。

アルテル・エゴは死体にかぶせて覆うばあいと、死体のそばに置くばあいの2つがあったと考えられる。エジプトのミイラの覆棺は前者の代表的な例である。仮装してもよいし仮面だけでもよい。通過儀礼のときだけ身体に赭土や白土をつけて化粧してもよい。いずれも、2つの ego が合一する精神であることには変りはない。あるもので身体を覆うことが通過儀礼の最大の要素であったと考えられる。このばあい、いったん死んだ人（または王でもよい）は、この覆いのもっている力によって再生するのである。わがマトコオフスマは大嘗祭と関係のあるものである。これを外気にふれない物忌みと解するのは⁴⁵⁾首肯しかねる。天孫降臨のさい、ニギノミコもこれを被って降臨する。日本書紀の一書（復）によると、トヨタマビメはそのミコをマトコオフスマとかやを以てつつみなぎさに置き捨てる⁴⁶⁾。これは密閉した箱またはうつぼ舟に入れられた神の子が海辺に出現する形式と関係がある⁴⁶⁾。フェルトにのせる即位儀礼は突厥、契丹、鮮卑にもみられる⁴⁷⁾。新羅の始祖は大卵の中に入って嬰兒の姿でソフルの聖林に降る。箱や大卵の中に入ることも、マトコオフスマに包まれた形相も神子の容器という概念に

よってまとめるならば同一類型とみなすことも可能であるとの説もある⁴⁸⁾。「容器」とみるのは重要である(後述)。タイ国王は再誕にさいして外套を用いる⁴⁹⁾。このフスマは羊膜で、子宮の羊膜に包まれた胎児の状態にもどってこの世に再誕しようとする模倣行為であるとする説もある⁵⁰⁾。おそらく基底にある形式の意味は別のものであったと考えられる。フスマ(衾)とは大形の衣服のことであったという説がある⁵¹⁾。マトコオフスマはがんらいは夜具としての衣服——ひと形をした——であったとも考えられるのである。エジプトのファラオも即位礼でマントをつけた⁵¹⁾。

死者に並べてアルテル・エゴを置くのは、墓地にみられるひと形にあらわれている。塔婆と像との間には深い連絡があり、塔婆の先の5部分は、人間が5大要素に帰するから、それをあらわしているとも考えられようが、古くから塔婆をほとけとかおからだと呼んでいるように、それは人体の5つの部分をかたどったものである⁵²⁾。五輪塔ももとは墓標であって同じことがいえる⁵³⁾。

さきに、葬い上げのときに、ひと形の塔婆を立てることや、もがりの終りにアルテル・エゴがあらわれることを述べた。仏事49日に、餅で手形や体の部分やひと形を49個つくる習慣は、神道のもがりのあとのひと形と同じ意味をもっている。死者の招魂儀礼であって、死者がこれで再生するのである。葬い上げのイヌソトバはひと形を象徴したことがあらためて明らかになる。戦後発見された立石寺(山寺)の円仁の遺骨は、円仁の頭部の木彫といっしょに棺におさまっていたが、これも招魂のひとつの形式と考えられる。仮面儀礼の変種とみればよい。おそらく唐の葬制をまねたものと思われる。殷代の宗廟の祀には尸(死者のひと形であったと思われる)立て、いけにえを割いて一家で共食している⁵⁴⁾。殷代からすでに、ひと形がマナ所持物として崇拝されていることは注目にあたいる。突厥では、死者を焚いて1次葬をし、その余灰をおさめて2次葬をやったが、その墳墓の屋室には死者の像を置いた⁵⁵⁾。突厥の墓のそばは石像カーメンナヤ・バーバが立っている。ロシア語では石の農婦の意味であるが男子像である。腰から下は自然石で、土に埋められた上半身像である。これは突厥碑文によればこれは死者が生前滅した敵の像である。「隋書」にもそのような記事があるが、さらに、被葬者の姿を写した像を墓に立てたといっている。イッシク・クル湖北西岸のポリショイ・ケミンの墓では細長い石が1列に立っている。その数だけの殺された敵の像だという。その先頭にカーメンナヤ・バーバが立っている⁵⁶⁾。カーメンナヤ・バーバは香山氏の記事からみると、1墓に1基であると思われる。この像に与えられた教授の解釈とは別に、この像はすべて被葬者の像であると自分は考える。像と石柱(複)との関係は、エジプトのkaの像

とその周りに置かれたウジャブティ人形（カルトゥッシュにはミイラと同名の名が書かれている）、前方後円墳と埴輪、中国戦国の被葬者と明器の構造と同じものであると考えられる。

さきに述べた顔面壺カノーボが、再葬の骨をおさめた理由もおのずから明らかになるであろう。この種の壺は中央アジアでもみられる。チュー川の支流、スクルク川の岸の5世紀ころの集落址で発見されたものは高さ19.5センチメートルのものである⁵⁷⁾。内容物の有無の記録がないが、大きさからして骨壺である可能性はある。あるいは、この壺が2次葬で骨のそばに置かれた可能性も考えられる。新大陸の顔面壺は墓の副葬品である⁵⁸⁾。顔面をもたなくても、壺がひと形に近いものと考えられたのは、ひじょうに古い時代からであったと思われるが、ここでは触れない。

いままでみてきたように、十字表象は基底においてはひと形であった。生命樹は2次的な段階の観念である。ひと形を土器でもってあらわすときは、わりあい具象的である。木を用いたり図案化するとき、抽象的なあらわれが多くなり、ほんらいの樹木崇拜と習合してしまったと考えられる。ヨーロッパでは招魂の儀礼はながいあいだのうちに無意識的な形骸となり、民衆の間ではキリスト教的な聖の感覚が儀礼に結びついたのであろう。

アケメネス朝のダリウス1世いごの墓はだん崖に彫られた巨大なギリシャ十字の中心部の入口からくりぬかれた内部の室にある。アケメネス墓の前身は、メディアの Duk-kan-i Daud や Dah-i Dukhtar の岩壁墓にもみられる。ことに十字表象に関していえば、前者においては十字の下半分が不完全ながらよく残っている⁵⁹⁾。アケメネス墓の特徴として、浮彫にあらわれる王は、拝火殿と三日月に置かれた円板の前にいるアフラムズダーに敬礼していることである⁶⁰⁾。ここにも、メソポタミヤでみた☉シンボルがみられるのである。ユダヤの星形は、もともとダブル・クロスから発展したのか、三日月をとった形から発展したのかいずれかであろう。アケメネス王墓はさらに明瞭なギリシャ十字をともなっている。


キリスト教の墓と十字架はいうに及ばない。ところが、十字墓は殷墟からも発掘されている。亜字型大墓といわれるものである⁶¹⁾。墓壙じたいが十字形をなしているし、槨室がまた十字形をなすものが多い。この亜字型墓の意味としては、卍形をした家の平面形とみる説がある⁶²⁾。また、卍形は家の基礎をあらわし、上から抑えて凹めた基台の掘り穴であるので「くぼめる、おさえてつめる」という原義をもち、漢字「亜」の原義とする⁶³⁾。この説に従うと、悪は心をおさえつけるのでぞっとする、嘔はおし、聖は壁をぬることからその材料また土台の土、亜流の亜は下積みとなって表面に出ない人などと

説明されるが、姪（初字は巫）の説明はできない。さらに、天子の居室とされている明堂も守の平面図をもっているのものでそうであるとする。さらに、この説明では、巫師や巫旅という職名の解釈はできない。巫室を天子の室に次ぐ室と解しても実体ははっきりしない。

巫はアルテル・エゴ、ひと形である。「次ぐ」、「比ともがら」は自然に理解できる。悪（古文は巫）は聖に触れる心的状態であり、聖と同居するみにくい穢の状態であり、価値的には善の反対である。姪は brothers in law のひとつである「あいむこ」で、ego に対する alter ego である。巫と剷（くびきる）は音義説ではよく説明できる。しかし、エジプトの ka の像は ceremony of the opening of the mouth を行なうし⁶⁴⁾、上述のコングのバブウェン族のひと形棺も口を開いている。巫はこの儀礼と関係のあるものと考えられる。剷は殷墟、モヘンジョ・ダロその他先史時代墓の頭蓋骨崇拜と何か関係があるのかも知れない。あるいは通夜の枕刀と関係するのかも知れない。巫は櫛室あるいは巫室に塗られた赭土または白土を指すのであろう。

巫は「異」、「鬼」と同じように、儀礼の場では仮面をつけたまれ人としてあらわされたと考えられる。祖霊と習合したのもきわめて初期からであったと考えられる（イランのフラワソもそうである）。祭祀官としての巫師や巫旅はこのような巫の祭を司る職能であったはずで、巫字型墓の儀礼にもまた関与したであろう⁶⁵⁾。明堂もしたがって、ひと形つまり巫形をした家であった。天子の招魂のためには不可欠なものであった。明堂図は、欽明天皇の御代、薬使主によって将来されているが、これは漢法の人体図であった。巫室は明堂と同じような聖なる室であったと考えられる⁶⁶⁾。礼記月令では明堂の儀礼は赤一色である。

甲骨文と金文の巫字標識の特徴として、巫が固有名詞のあとに置かれたり、守形（いろいろな変種がある）の中に固有名詞が入れられる。名は実体と同じ効果をもっていた時代には、これは招魂の呪術であったはずである。モソ族は氏族をあらわす象形文字にはひと形をそえている⁶⁷⁾。キリスト教では、十字は死者の名にそえられるが、Pope や Bishop のような高位の人物は現世においても名前に十字をそえる。聖別する宗教的感覚の基底にあるものは、殷人のそれである。

ちなみに、十干の初字はすべて、人の何らかの形態であると思う。つまり各文字はひと形である。例えば甲は十で癸はである⁶⁸⁾。初源は暦数に関するものではなかったであろう。殷王室の近祖先公いらい名前に付せられた十干の文字は、誕生日をあらわすというよりは巫形標識のようなものと考えの方が自然である。

ひと形のあらわれは前方後円墳にもみられる。いわゆる手鏡形のものや、てるてる坊主形のものや、くびれの部分に造り出しのついた形のもがみられる。手鏡形のは、頭部だけをそえる文化のもであったか、仮面をかぶせるそれであったのか、あるいはこの形じたいがひと形であったのか、いろいろな可能性がある。いわゆる後期の典型的な前方後円墳は、手足のないてるてる坊主形である。いわゆる中期古墳には造り出しがついているが——4世紀の崇神天皇陵は自分がみたところでは、ふき石で修理された造り出しをもつ——うわなべ、こなべ古墳などは現代人の感覚でもひと形そっくりである。前方後円墳の成立過程や形状に関しては蒲生君平いろいろさまざまな説がある⁶⁹⁾。宮崎康平氏はこれを伸展埋葬の拡大された人間の姿と考えられ、太陽と天の神々に対決しようとした偉大な征服者たちの姿とみておられる⁷⁰⁾。自分の意見でも、前方後円墳はひと形である。理由はいままで述べてきたとおりである。ここに上代人の招魂饗礼がみられるのである。奈良飛鳥の石舞台も自分には巨大なアルテル・エゴにみえる。

ナイル河にクルックス・アンサータが立っていることから、エジプト十字の起源はナイル河の水量計、みおつくしであるという説があることは前述したとおりである。ところが日本のみおつくしは又(又)にたて棒をつけた形で、大阪の市章、なにわづのみおつくしにみられる。舟航にはつねにあらたまを必要としたらしく思える。古代人の感覚では、川や河はこの世と他国との境界で、他国に旅立つには、招魂をおこなわねばならなかった。燧石で魂よびをする方法は古い風習のひとつであったと考えられる。祭礼においては、主船はへさきにぼんでんを立てるのはふつうにみられる。神功皇后摂政前記によると、皇后の新羅遠征のさい神のおしえがあり、にきみたまは玉身(みついで)にしたがい、みいのちを守り、あらみたまは先鋒としてみいくさの船を導かん、とのことであった⁷¹⁾。あらみたまは招魂のさいによびもとめる魂でありにきみたまは身体にやどる魄であった。前述したように正月の宝舟に又(又)が書いてあるのは×印の転化したものとの説がある⁷²⁾。又(又)と丩は起源的には同じものと思う。いっぽうは宝舟に、他方はみおつくしになったものである。さらに、船の先導者として、ぼんでんになり、アイヌではイナウになったのであろう。境界に立つみおつくしはさらに境界神でもある。境界神の問題は別の機会にゆずりたいと思う。(1970.8) (筆者は大阪外国語大学助教授)

註

1) 原著はフランス語で、本書はその英語版である。エリアーデ著一堀一郎訳、大地・農耕・女性

十字表象の研究

—比較宗教類型論—, 未来社1968は, はしがきと第1, 7, 8, 9章および結論を訳したものである。

- 2) 民族学研究, 33巻, 3・4号, 1969, p. 264に要旨がある。
- 3) H. Frankfort, *Kingship and the Gods*, 1948, Fig. 31.
- 4) Hastings, *Encyclopaedia of Religion and Ethics* の Cross の項を参照されたい。
- 5) ライオネル・カーソン—加藤一朗訳, 古代エジプト, 昭41, p. 153.
- 6) 村田數之亮, *エーゲ文明の研究*, 昭24, p. 228-9.
- 7) 野上素一, 金倉英一共著, *沈黙の世界史4 イタリア*, pp. 78-9
- 8) 上野照夫, *インドの宗教美術における象の表現*, 西南アジア研究 No. 13, p. 80.
- 9) 白川静, 漢字, 1970, p. 59 ただしこの書物に対しては藤堂明保博士の書評(文学, 1970, 7, Vol. 38, pp. 786-792)と松本昭氏のそれ(言語生活, 1970, 9)がある。景行天皇, 神后皇后もシンボルとしてのおのまさかりをもっておられる。日本古典文学大系 67, p. 301, 注25はおかしい。
- 10) 岩田慶治, *日本文化のふるさと*, 昭41, p. 122.
- 11) 末永雅雄, *古墳*, 昭44, p. 70第29図。
- 12) 貝塚茂樹編, *古代殷帝国*, p. 197, 第24図。
- 13) 石田英一郎, *マヤ文明*, 昭42, p. 81, p. 168, 図17。
- 14) “ ” , “ ” , p. 191.
- 15) H. Jensen, *Die Schrift in Vergangenheit und Gegenwart*, 1969, S. 443.
- 16) “ ” , “ ” , S. 257.
- 17) 望月佛教大辞典; Pauly-wissowa; Hastings; 土居光知, *古代伝説と文学*, 1960, p. 326を参照されたい。
- 18) 野上一金倉, 前掲書, p. 37, 127, 152.
- 19) 日本古典文学大系 1, p. 197; 67, pp. 425-27, pp. 630-1の補注12の9. 補注は正鵠を射ていない。日本文学の歴史 1, 昭42, pp. 257-9.
- 20) 定本 柳田国男集 第十三巻所収「犬そとばの件」, 井之口章次, *日本の葬式*, 1965, p. 172以下, ただし p. 176 Y形の解釈は民俗学としてのもの。
- 21) 井之口, 前掲書, pp. 131, 139, 222.
- 22) 岩田, 前掲書, pp. 170-1, 写真と解説と解釈。
- 23) 今野圓輔, *日本迷信集*, 昭40, p. 95 以下。
- 24) 折口信夫全集 第二巻, p. 23.
- 25) 井之口, 前掲書, p. 163.
- 26) 小林行雄, *古墳の話*, 昭34, pp. 184-8.

- 27) 石田, 前掲書, pp. 87, 102.
- 28) 石田, 前掲書, pp. 146-7, 88-9, 152.
- 29) 増田義郎, 古代アステカ王国, 昭38, p. 224.
- 30) 泉靖一, インカ帝国, 昭34, pp. 175, 198 の挿図。
- 31) イェンゼン他著, 大林太良—鈴木満男訳, 民族学入門, 昭38, pp. 20, 85 の写真。
- 32) 土居, 前掲書 pp. 271, 319, その他。
- 33) Frankfort, 前掲書, pp. 210, 394 註94.
- 34) 林良一, シルクロード, 1962, pp. 108-9 サーサーン朝王冠宝飾一覽。
- 35) J. M. Unvala, The winged disk and the winged human figure on ancient Persian monuments in Modi Memorial Volume, 1930, pp. 488-513, ことに 508-13 の図。
- 36) B. Spuler, Iran in früh-islamischer Zeit, 1952, S. 419, および Corpus Inscriptionum Iranicarum, Vol. VI, Seals and Coins, 1968 を参照されたい。
- 37) 水野清一編集, 東洋の歴史 1, p. 214. 縦, 横, 斜に木を組み合わせた形で, これに天の神が降ってくる考えた。キリスト教の十字架ももとは同じ意味, とある。音義説から説明するものとして, 藤堂明保, 漢字語源辞典, 昭40, pp. 470-2. 同, 漢字の起源, 昭41, pp. 35-6. 「全部をとりまとめる」の基本義から説明している。その他, 貝塚, 前掲書, p. 106.
- 38) 日本古典文学大系, 1, p. 117.
- 39) S. Hedayat, Nirangistan², 1956, p. 47. H. Massé, Croyances et Coutumes Persanes, 2 Vols., 1938 にも Hedayat からの引用あり。中国の契兄, 契弟については, 三田村泰助, 宦官, 昭38, p. 38.
- 40) 折口, 前掲書 p. 358 以下。
- 41) 岩波講座, 哲学 XIII, 1968, 山口昌男「アフリカの知的可能性」p. 107.
- 42) ユリウス・リップス著, 大林太良—長者信弘訳, 生活文化の発生 下巻, pp. 217-8.
- 43) E. O. James, Myth and Ritual in the Ancient Near East, 1958, p. 213 ff
- 44) ハリソン著—佐々木理訳, 古代芸術と祭式, 1964, p. 9.
- 45) 日本古典文学大系 67, p. 184.
- 46) 石田英一郎, 桃太郎の母, 1966, p. 206.
- 47) 護雅夫, 遊牧騎馬民族国家, 昭42, pp. 78, 97-9.
- 48) 三品彰英論文集 第一巻 日本神話論, 昭45, p. 128.
- 49) 文学, 1970, 2, p. 62.
- 50) 西郷信綱, 古事記の世界, 1967, p. 135.
- 51) 柳田, 前掲集, 第二巻, p. 34, Frankfort, 前掲書, p. 85.
- 52) 柳田, 前掲集, 第十巻, p. 86, 荻原雲来文集, 昭13, pp. 910-11.

十字表象の研究

- 53) 圭室諦成, 葬式佛教, 昭39 (再版), pp. 152-3.
- 54) 水野, 前掲書, p. 344.
- 55) 江上波夫, 騎馬民族国家, 昭42, pp. 110-11.
- 56) 香山陽坪, 砂漠と草原の遺宝, 昭38, pp. 104-6.
- 57) " , " , p. 109.
- 58) 泉, 前掲書, pp. 108-9.
- 59) Hans Henning von der Osten, Die Welt der Perser³, 1956, TT. 38, 3.
- 60) " , " , S. 83.
- 61) 樋口隆康, 沈黙の世界史 9 中国, 1969にくわしい紹介がある。
- 62) 加藤常賢, 支那古代家族制度研究, 昭15, pp. 547-71.
- 63) 藤堂明保, 漢字語源辞典, pp. 404-5, 同, 漢字の起源 p. 48.
- 64) E. O. James, 前掲書, pp. 87 f., 214.
- 65) 貝塚, 前掲書, p. 244 は巫を巫臣とみる。伊藤道治, 古代殷王朝のなぞ, 昭42, p. 112, 126 は巫はある集団を意味し, その職務は宗教的なものであったとする。
- 66) 原田淑人, 東亜古文化論考, p. 48 は, 前方後円墳が家形であるとし, 宮崎県西都原出土の十字形家形埴輪をあげている。
- 67) 西田, 前掲書, pp. 16-17.
- 68) 貝塚, 前掲書, p. 169 表。
- 69) 末永, 前掲書, p. 61 に諸家の説の表がある。
- 70) 宮崎康平, まぼろしの邪馬台国, 昭42, p. 74.
- 71) 日本古典文学大系 67, p. 336.
- 72) 折口, 前掲全集, 第二巻, p. 23.